

## 詩篇95-100篇 「主への喜びの歌」

### 1A 礼拝への招き 95

1B 賛美の歌をもって 1-6

2B 御声を聞くことによって 7-10

### 2A 日から日への救い 96

1B 国々への良い知らせ 1-6

2B 国々の礼拝 7-13

### 3A 主の来臨の裁き 97

1B 火による焼き尽くし 1-7

2B 聖徒たちの喜び 8-12

### 4A 御民と被造物の救い 98

1B 世界に広がるイスラエルの救い 1-3

2B 全地の喜び 4-9

### 5A 聖なる主 99

1B 国々の民の畏怖 1-3

2B 王と祭司のさばき 4-9

### 6A 御前に向かう主の民 100

## 本文

詩篇 95 篇から読んでいきます。前回、93 篇から 100 篇までが、「王が即位する賛歌」になっています。私たちの主なる神が王であり、この方がこの地上で統治されるのだということを歌っているものです。そして 95 篇から 100 篇までは、その喜びが炸裂します。私たちの愛する、いや私たちを愛してやまない主なる神が、王としてこの地を支配してくださることを私たちが喜び叫び、歌い、そしてひれ伏します。私たちがいつも使っている、「礼拝」という言葉。これは「礼をして拝する」ということです。まさに王の前に出る時に行うことであります。ですから、これから私たちは、礼拝とは何をするとおころなのか、それを学ぶことができます。

### 1A 礼拝への招き 95

95 篇は、礼拝への招きの詩篇として有名です。1 節から 6 節までは喜び歌うように招き、それから 7 節から厳しい警告を含めた招きをしています。

### 1B 賛美の歌をもって 1-6

95:1 さあ、主に向かって、喜び歌おう。われらの救いの岩に向かって、喜び叫ぼう。95:2 感謝の歌をもって、御前に進み行き、賛美の歌をもって、主に喜び叫ぼう。

これは、初めの私たちに対する神の礼拝への招きです。どのように礼拝しなければならないでしょうか、「主に向かって喜び歌い、喜び叫ぶ」ことです。私たちが、もし前で演奏する賛美を聞いて、それに合わせて歌おうという消極的なものであれば、それは主に悲しまれることであることを知らないといけません。かつて、王の前に出る時に悲しい顔つきをすれば、その役人は処刑されてもおかしくありませんでした。ネヘミヤがペルシヤ王の前で悲しい顔つきをして、それに気づかれた時に恐れましたが、それが理由です。したがって、私たちは礼拝を捧げるということは、日頃から、「主にあつて喜ぶ」という心の姿勢を保つ務めがあります。主の御前に集えるという、その大きな期待感と喜びをもっていくような、そういう一週間を過ごしているかということが問われます。

そして、「感謝」して「賛美」していますね。あらゆることに感謝するというのも、私たちは献身的に行うべき務めです。感謝する気持ちになれるからという感情の問題ではなく、感謝する心の状態を保つという信仰的決断です。そして賛美します。感謝が満ちあふれる時にそれは賛美に変わります。そして、「歌」にしてその喜びと感謝、賛美の思いを表します。新約聖書にも、教会に対して具体的に、歌をうたうことを命じられています。「コロサイ 3:16 キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。」

95:3 主は大いなる神であり、すべての神々にまさって、大いなる王である。95:4 地の深みは主の御手のうちにあり、山々の頂も主のものである。95:5 海は主のもの。主がそれを造られた。陸地も主の御手が造られた。

これは、なぜ礼拝するのか、その理由が書かれています。一つは、大いなる王だからです。大いなるというのは、他のものとは比べ物のないような、比類なき方ということです。私たちが、これはあまりにも大きな力であり圧倒されて萎縮する、打ちひしがれる、そんなことがないでしょうか？しかし、それらのことよりはるかに優れて高い所におられる方がいるのだ、ということを知るだけでも、私たちの心に喜びが戻ります。もう一つは、すべてのことは「御手の中にある」ということです。地の深みにあることも、山の高嶺にあることも、すべて神の主権の中にあります。だから、安心です。どんな恐ろしい悪の勢力も、主の御手の中で操り人形にしかすぎません。

そして、三つ目はこの方が造り主だからです。この方が全てのものを造られました。ですから、私たちは自分自身さえ自分のものではなく、神の所有になっています。その他のものも、みな神の所有物です。ゆえに、次の招きに入ります。

95:6 来たれ。私たちは伏し拝み、ひれ伏そう。私たちを造られた方、主の御前に、ひざまずこう。

私たちはひれ伏します。自分たちを造ってくださった方にひれ伏すのは当然のことです。私たちは自分の喜びのために生きているのではなく、神の喜びのために生きています。そんなの自由が

なくなって楽しくない、と思うかもしれません。いいえ、自分が造られた目的を知っているのは、造った本人です。神の悦びの中に生きることこそが、自分に悦びをもたらします。皿として造っているのに、フォークのように生きてそれほど窮屈で、葛藤する生き方はありません。神の前にひれ伏して、すべて神に明け渡して生きることによって、この地上で何をするにしても、その目的の中で喜ぶことができます。

## 2B 御声を聞くことによって 7-10

95:7 主は、私たちの神。私たちは、その牧場の民、その御手の羊である。きょう、もし御声を聞いたら、95:8 メリバでのときのように、荒野のマサでの日のように、あなたがたの心をかたくなにしてはならない。

7 節からは、警告の伴った招きです。私たちが、喜び叫んで主の前にきて、ひれ伏す時に、私たちはちょうど、すべての導きと養いをゆだねている牧者である神ご自身の声を聞かないといけません。当時のイスラエル人はこのことを熟知していました。羊が羊飼いなしに決して生きることができないことを知っています。我々日本人に言うならば、二歳の子が保護者なしにどこまで生きられるか、ということです。羊はけれども、羊飼いの声には信頼しています。必ず聞き分けます。そこで今朝の説教で学んだ、「心を頑なにしてはいけない」という警告に入る訳です。

95:9 あのとき、あなたがたの先祖たちはすでにわたしのわざを見ておりながら、わたしを試み、わたしをためした。95:10 わたしは四十年の間、その世代の者たちを忌みきらい、そして言った。「彼らは、心の迷っている民だ。彼らは、わたしの道を知ってはいない。」と。95:11 それゆえ、わたしは怒って誓った。「確かに彼らは、わたしの安息に、はいれない。」と。

礼拝を捧げる時は、必ず主からの声があります。聖書の言葉によって、聖霊によって、神が私たちに語られます。それを心から受け入れて、それで主の導かれる所に行き、また養いを受けるのです。これをしないと、必ず死に絶えてしまうのだということでもあります。

ヘブル書 3 章から 4 章にかけて、この詩篇の箇所が引用されています。そしてヘブル書の著者はこう言っています。「3:12-13 兄弟たち。あなたがたの中では、だれも悪い不信仰の心になって生ける神から離れる者がないように気をつけなさい。「きょう。」と言われている間に、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされてかたくなにならないようにしなさい。」私たちのこの地上での歩みは、荒野のように陰しいです。だから、その陰しさのゆえ悪い不信仰の心になる試みを受けます。だからこそ、「きょう」と強調しているように、後で聞けばよいのではなく、今、聞かなければいけないものを聞いて、それで心を清く保つのです。そして、他の兄弟たちからの励ましを受けるのです。

## 2A 日から日への救い 96

96 篇は、「日の上るところからその沈む所まで告げられる神の救い」がテーマです。イスラエルの中で主が王であるとして喜び歌うのではなく、その救いの喜びを国々にまで告げて、それで国々がこの方を王としてひれ伏し拝むように招いている詩篇です。いわば、「宣教の詩篇」であります。

### 1B 国々への良い知らせ 1-6

96:1 新しい歌を主に歌え。全地よ。主に歌え。96:2 主に歌え。御名をほめたたえよ。日から日へと、御救いの良い知らせを告げよ。96:3 主の栄光を国々の中で語り告げよ。その奇しいわざを、すべての国々の民の中で。

「新しい歌」という言葉から始まります。これは 98 篇の冒頭でも同じです。黙示録 14 章で、十四万四千人の神の僕たちが、新しい歌をうたっている場面が出てきます。但し書きがあり、彼ら以外は、だれもこの歌を学ぶことができなかつた、とあります(3 節)。「キリストにある者はみな、新しく造られた者である」と使徒パウロが言いましたが、その新しさの中である主との親しい交わりは、本人以外には真似して持つことはできません。自分自身が主から直接与えられなければいけないものです。そのような新しさをもって、私たちが主の前に出ている時に、たとえ以前に歌った歌であっても、新しさをもって歌うことができます。私たちは、外なる人が衰えても、内なる人は日々新たにされていますから。

そして、全地に対して、主に歌えと命じています。それを強調するために、日から日へと言っています。主は、全地の神であられ、イスラエルだけの神ではありません。だから、その救いの喜びを、神を知らない国々にも告げ知らせなければいけないのです。私たちは、自分の周りの方で神を知らない人がいて、その方がキリストの救いを受け入れ、その罪が赦され、永遠の命が与えられたことを知る時、その救いに大きな喜びを抱きますね。このことを話しています、主への賛美が、救いが伝わっていく中で広がっていくのです。そして、この神の啓示が、イエス様が弟子たちに与えられた大宣教命令になるのです。「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。(マルコ 16:15)」

96:4 まことに主は大いなる方、大いに賛美されるべき方。すべての神々にまさって恐れられる方だ。96:5 まことに、国々の民の神々はみな、むなしい。しかし主は天をお造りになった。96:6 尊厳と威光は御前にあり、力と光栄は主の聖所にある。

国々が拝み、仕えている神々がいますが、主は大いなる方、圧倒的に優れた方で、恐れられるべき方です。偶像から離れて、生きる神に立ちあがることができることを、主は願われておられます。そして、偶像は必ずしも木や石で造られたものだけに限りません。私たちは、いろいろなものを恐れてしまいます。人や現象、将来、いろいろな恐れがありますが、圧倒的に優れた方であり神

をあげれば、この方のみを恐れればよいことを知ります。

## 2B 国々の礼拝 7-13

96:7 国々の民の諸族よ。主にささげよ。栄光と力を主にささげよ。96:8 御名の栄光を主にささげよ。ささげ物を携えて、主の大庭にはいれ。96:9 聖なる飾り物を着けて、主にひれ伏せ。全地よ。主の御前に、おののけ。96:10 国々の中で言え。「主は王である。まことに、世界は堅く建てられ、揺らぐことはない。主は公正をもって国々の民をさばく。」

これが、主の与えられた終わりの幻であり、かつ私たちに願われていることです。ご自分の民として、イスラエルだけでなく全ての国々の民がこの方を王としてあげめることを願っておられます。主の大庭、すなわち神殿のところまで来て、王なる主をあげめるのです。これはキリストの再臨の後、神の国で成就しますが、しかし霊的に主はイエス・キリストの福音によって、教会を建てることを行なうことによって成し遂げたいと願っておられます。どの国においても、どの文化においても、どの言語においても、主の名はただ一つ、イエス・キリストであり、イエスの名をほめたたえることを願っておられます。

この前の東アジア青年キリスト者大会で、その発起人の李勝蔵牧師が私や他の日本人牧師を見ると、本当に喜んでくださいます。年を召した方なので、日本語さえ少し話すことのできる程の時代、そう日本植民地下に生きていた方です。その時の日本は朝鮮人キリスト者に神社参拝を強要していました。その日本人が、主をほめたたえるクリスチャンに変えられる時に、それを喜んでいる心は、まさに神の心であります。私も、例えば、ヒンズー教が盛んなネパールにおける、宣教の働きについての映像を見ましたが、そこに出てくる若者が主への賛美をギターで導いている姿を見た時に、ああ彼も私の兄弟ではないか、と感動しました。私たちの家族はいろいろな皮膚の色、言葉、文化を持っているんですね。でも家族なのです！

96:11 天は喜び、地は、こおどりし、海とそれに満ちているものは鳴りとどろけ。96:12 野とその中にあるものはみな、喜び勇め。そのとき、森の木々もみな、主の御前で、喜び歌おう。

主があらゆる国々があげめられている中で、天や地までが喜びおどっています。この躍動あふれる風景は、私たちはまだ先を待たねばなりません。これは、創世記3章、アダムが罪を犯した時に関わる話です。地が呪われたものとなった、と主が宣言されました。それで、被造物は神の意図されている理想の状態から離れ、半ば閉じ込められてしまった状態になっています。ナルニア国物語の第一弾は、まさにそのことを描いています。冬のナルニアは、元々はそのようではなかったのです。しかしアスラン、すなわちキリストが近づくと息を吹き返し、戻って来たら一気に春になり、生氣を取り戻します。

今、環境問題について多くが語られますが、環境問題が良くなる方法をご存知ですか？それは、

人々が贖われることです。変に聞こえるかもしれませんが、環境問題の解決は福音宣教にあります。そしてキリストの再臨にあります！アダムが罪を犯したことによって、自然界が呪われたように、今度は人が贖われることによって、自然界も贖われるからです。「ローマ 8:19-21 被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現われを待ち望んでいるのです。それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。」

96:13 確かに、主は来られる。確かに、地をさばくために来られる。主は、義をもって世界をさばき、その真実をもって国々の民をさばかれる。

主は確かに来られます。この言葉をもって、パウロはギリシヤの神々しか知らなかったアテネの人々に悔い改めを呼びかけました。「使徒 17:30-31 神は、そのような無知の時代を見過ごしておられましたが、今は、どこでもすべての人に悔い改めを命じておられます。なぜなら、神は、お立てになったひとりの人により義をもってこの世界をさばくため、日を決めておられるからです。そして、その方を死者の中からよみがえらせることによって、このことの実証をすべての人にお与えになったのです。」しばしば、生きている神、天地創造の神について知らされていないから裁きを免れる、という教えが説かれます。それは偽りの教えです。神が、イエスを死者の中から甦らせたことによって、全世界に対して、他の神々に仕える異教徒であっても、悔い改めを命じておられるのです。

### **3A 主の来臨の裁き 97**

97 篇は、主の来臨における火の裁きと、それを喜ぶ聖徒たちの姿を描いています。

#### **1B 火による焼き尽くし 1-7**

97:1 主は、王だ。地は、こおどりし、多くの鳥々は喜ぶ。

主が王であるという状態から宣言します。主が王となられている時に、全地は小躍りして喜んでいます。そして次に、少し時間的に戻って、主が来られる時の裁きの様子を描いています。

97:2 雲と暗やみが主を取り囲み、義とさばきが御座の基である。97:3 火は御前に先立って行き主を取り囲む敵を焼き尽くす。97:4 主のいなずまは世界を照らし、地は見て、おののく。97:5 山々は主の御前に、ろうのように溶けた。全地の主の御前に。97:6 天は主の義を告げ、すべての国々の民は主の栄光を見る。97:7 偶像に仕える者、むなしいものを誇りとする者は、みな恥を見よう。すべての神々よ。主にひれ伏せ。

使徒ペテロは、第二の手紙でかつて、世界は水によって滅ぼされたが、主は二回目、火によって滅ぼすことを預言しました。かつて、その姿は僅かにシナイ山に現われた時にイスラエルの民は

見ることができました。黒雲、稲妻、そして火が降りてきました。しかし今、それが全世界的に起こり、そして神に反抗する敵どもをことごとく滅ぼすことによって現われます。ゼカリヤ書 14 章には、エルサレムに攻め入る世界の軍隊が、生きたまま、立ったまま腐っていく姿を描いています。そのことによって、残された者たちはこの方のみが神であることを認めます。その終わりの日の幻に基づいて、今、空しいことをしている者たち、偶像を拜んでいる者たちに、この方にひれ伏せと命じているのです。

## 2B 聖徒たちの喜び 8-12

これは、神を敬わない者たちにとっては恐ろしいことでしょう。しかし、神を愛する者たちにとっては歓喜に満ちた出来事です。主が、不正を行なう者どもを裁いてくださるからです。私たちは、とてつもない不正義を目にする時に、意気消沈します。悪の勢力が暴れ回っています。しかし、それらは神が滅ぼされるために、今、暴れているにしか過ぎません。詩篇 76 篇 10 節に、「人の憤りまでもがあなたをほめたたえ」とあります。神がむしろ、それらの怒りを力強く治めておられるのです。そして、彼らを激しく滅ぼされるのです。ですから、今、世界が騒いでいます。これまでの秩序が壊れています。経済でも政治でも、安全保障面でも、教育でも、あらゆる価値観が崩れています。これは、神がただ王となるその国の到来が近づいている前触れであり、私たちは喜ぶのです。

97:8 シオンは聞いて、喜び、ユダの娘たちも、こおどりました。主よ。あなたのさばきのために。  
97:9 まことに主よ。あなたは全地の上に、すぐれて高い方。すべての神々をはるかに抜いて、高きにおられます。

シオンにいる者たち、ユダにいる者たちにとって、歓喜となるのです。自分たちではどうしてもできない不条理、これをもっぱら主が清算してください。そして、主ご自身だけが高く上げられます。「2テサロニケ 1:9-10 そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです。その日に、主イエスは来られて、ご自分の聖徒たちによって栄光を受け、信じたすべての者の…そうです。あなたがたに対する私たちの証言は、信じられたのです。…感嘆の的となられます。」

97:10 主を愛する者たちよ。悪を憎め。主は聖徒たちのいのちを守り、悪者どもの手から、彼らを救い出される。97:11 光は、正しい者のために、種のように蒔かれている。喜びは、心の直ぐな人のために。97:12 正しい者たち。主にあって喜べ。その聖なる御名に感謝せよ。

主を愛する者たちにとって、この世における生活はますます葛藤に満ちたものとなっています。義に飢え渴く者は幸いである、とありますが、主を愛する者にはこの地上が住みづらいものとなり、渴くものです。しかし、イエス様の約束どおり満たされるのです。そこで、私たちはその悪を憎みます。今、ここにあるように、悪は必ず神が裁いてくださいます。悪を神が裁いてくださるからこそ、私たちはただ神のみをあがめることができ、神の愛に満たされて、他の人々に光を宣べ伝えるこ

とができるのです。

そして、光が種のように蒔かれている、と書いてあります。まだすべてが光に満ちる神の国の中に生きていませんが、すでに種として植えられています。それゆえ、私たちは希望があり、夜明けがくるのを待ち望んでいるのです。そして、その中で喜ぶのです。この暗き世において喜び、楽しみます。

#### **4A 御民と被造物の救い 98**

98 篇は、96 篇にある全世界に対する救いを歌っています。96 篇では、国々に救いを告げ知らせることが書かれていましたが、98 篇では、その救いを見た世界が主を賛美する姿を描いています。

#### **1B 世界に広がるイスラエルの救い 1-3**

98 賛歌 98:1 新しい歌を主に歌え。主は、奇しいわざをなさった。その右の御手と、その聖なる御腕とが、主に勝利をもたらしたのだ。98:2 主は御救いを知らしめ、その義を国々の前に現わされた。98:3 主はイスラエルの家への恵みと真実を覚えておられる。地の果て果てまでもが、みな、われらの神の救いを見ている。

イスラエルが、救われます。それは、ローマ 11 章によると異邦人の救いの完成の時、それからイスラエルがみな救われるとあります。荒らす憎むべき者が聖なる所に立つので、選びの民は荒野に逃げますが、今までかつてなかった大患難になるとイエス様は言われました。選びの民のところには、惑わす者、偽預言者がやってきますが、キリストが天から雲に乗って戻って来られます。黙示録 19 章によると、荒らす憎むべき者である獣と、偽預言者は生きたまま火と硫黄に池に投げ込まれます。こうしてイスラエルは敵の手から神の聖なる腕によって救われます。そして、国々対して、イスラエルに神が約束してくださったように、確かに救いを得たことを示します。

3 節の、「恵みと真実を覚えておられる」というのは、すばらしいですね。イスラエルはとてつもない迫害と患難を受けます。主から忘れられたかのようなのです。けれども主の彼らへの好意は決して忘れられることはありません。これをもって私たちに対しても、どんなことがあっても恵みと真実は覚えらえることを知ることができます。

#### **2B 全地の喜び 4-9**

98:4 全地よ。主に喜び叫べ。大声で叫び、喜び歌い、ほめ歌を歌え。98:5 立琴に合わせて、主にほめ歌を歌え。立琴と歌の調べに合わせて。98:6 ラッパと角笛の音に合わせて、主である王の御前で喜び叫べ。

全地に対して、世界に知らしめられた救いを喜び、大声で喜べと命じています。なんという壮大



な賛美でしょうか！世界の各地で、主に対して一斉に楽器を奏でて賛美するのです。

98:7 海と、それに満ちているもの。世界と、その中に住むものよ。鳴りとどろけ。98:8 もろもろの川よ。手を打ち鳴らせ。山々も、こぞって主の御前で喜び歌え。98:9 確かに、主は地をさばくために来られる。主は義をもって世界をさばき、公正をもって国々の民を、さばかれる。

世界において、賛美を奏でるだけでなく、自然界までが呼応して喜び歌います。私たちは、自然の中に神の音楽があることを知るべきでしょう。もちろん人が造った楽器ではありませんが、そこにある生命力は神の音楽として主の前に届くのです。これが、呪いが取り除かれた後に回復する土地の姿です。そして、96 篇と同じく、主が国々を裁かれるために来られることを歌っています。義をもって世界を裁くとありますが、先ほど読みましたように、使徒パウロはこれをイエスがよみがえられたことによって、イエスにあって神が裁くことを教えています。天下に、イエスの名以外に私たちが救うことのできるべき名は他にないのです。

私たちが、このような全世界的な幻をもっていきたいですね。先週の説教で、ユダヤ人たちは同胞にしかイエスの名を伝えていなかったところ、ギリシヤ人にも伝えたことを話しました。地の果てにまで、わたしの証人となりなさいとイエス様は言われていたのに、自分たちの間にだけ留まっていたのです。しかし、私たちはこの全世界的な大賛美の幻を抱えながら、あらゆる国々の人々が主を賛美することを夢見ないといけません。まだ真の神を知らない人々、民族、種族のことを覚えて祈らないといけません。

## **5A 聖なる主 99**

99 篇は、「主が聖なる方」であることに強調が置かれています。これまでと同じように、主が王であられ、世界がこの方をあがめるのですが、主が聖であるので、私たちがひれ伏すのだという歌です。

### **1B 国々の民の畏怖 1-3**

99:1 主は王である。国々の民は恐れおののけ。主は、ケルビムの上の御座に着いておられる。地よ、震えよ。99:2 主はシオンにおいて、大いなる方。主はすべての国々の民の上に高くなります。99:3 国々の民よ。大いなる、おそれおおい御名をほめたたえよ。主は聖である。

主が今、君臨しておられます。そこで国々の民が恐れおののいています。地は震えています。なぜか？主がケルビムの上の御座に座しておられるからです。これは、モーセの幕屋において、契約の箱に贖いの蓋があり、それにケルビムが彫られていたことを思い出してください。その翼の間からわたしは、あなた方に語ると主は言われました。そこに主の御座があるからです。そしてエゼキエル 1 章において、ケルビムがおり、その上に人の子が着座しておられる幻があります。このような聖なる方がおられるのですから、国々の民はひれ伏すのです。

「聖」は、区別されていること、比類なきすがた、隔絶していること、超越して、説明を超えていること、そのような意味になっています。聖なる方だからこそ、私たちはひれ伏し、頭を垂れ、この方をあがめるのです。黙示録 4 章において、四つの生き物が叫びます。「8 節 聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。神であられる主、万物の支配者、昔いまし、常にいまし、後に来られる方。」そして、二十四人の長老たちがひれ伏して、自分たちの冠を投げ出すのです。ですから、神は恵みと真実のある方、私たちを愛してやまない方で、私たちはこの方を恋い慕います。それと同時に、聖なる方であり私たちは、畏怖によってこの方に近づくのです。私はある意味、兄弟姉妹として私たちは神の家族として存在します。けれども、なあなあ関係、いわゆる「ダチ」ではないのです。そこには聖なる方キリストがおられて、その中で愛し、結び合わさっています。主への恐れを抱きながら互いに親しくなります。

## 2B 王と祭司のさばき 4-9

99:4 王の力は、さばきを愛する。あなたは公正を堅く立てられた。あなたは、ヤコブの中で、さばきと正義を行なわれた。99:5 われらの神、主をあがめよ。その足台のもとにひれ伏せ。主は聖である。

主は聖なる方であり、ここでは王の裁き、公正な裁きがほめたたえられています。裁きというと罰を下すように聞こえるかもしれませんが、そうではなく公正に統治する、秩序があり、そこに正義があるということです。このような秩序があれば、平和が満ちあふれます。公正というのは、力と富の配分が適切に行われる状態です。力の不均衡があれば、必ず虐げが起こります。同じように富の偏りがあればそこに虐げが生まれます。神は知恵によって、その配分を適切に行ってください、私たちはすべてが満足し、平和を保つことができます。

教会は正しい王キリストがおられます。ですから教会の中で、持つ者が持たない者に分け与えることをパウロが教えています。「今あなたがたの余裕が彼らの欠乏を補うなら、彼らの余裕もまた、あなたがたの欠乏を補うことになるのです。こうして、平等になるのです。「多く集めた者も余るところがなく、少し集めた者も足りないところがなかった。」と書いてあるとおりです。(2コリント 8:14-15)」そして力についても、「私たち力のある者は、力のない人たちの弱さをになうべきです。自分を喜ばせるべきではありません。(ローマ 15:1)」とあります。

99:6 モーセとアロンは主の祭司の中に、サムエルは御名を呼ぶ者の中にいた。彼らは主を呼び、主は彼らに答えられた。99:7 主は、雲の柱から、彼らに語られた。彼らは、主のさとしと、彼らに賜わったおきてとを守った。99:8 われらの神、主。あなたは、彼らに答えられた。あなたは、彼らにとって赦しの神であられた。しかし、彼らのしわざに対してはそれに報いる方であった。99:9 われらの神、主をあがめよ。その聖なる山に向かって、ひれ伏せ。われらの神、主は聖である。

主が聖なる方ですが、ここでは主がその聖所におられ、そこで仕えている僕たちが呼びかけ、主

がそれに答えて語られることを話しています。重要な中心的な、部分です。聖なる神が、聖なる所から語られています。モーセとアロンは聖所の中に入り、主から語られました。そしてサムエルも、祭司の下で育てられた子で主から語られました。そして語られたところにあるその御言葉は、赦しに富む姿でありました。また、行ないに対して報いる方でありました。

私たちはキリストにあつて神に対する祭司とされました。同じようにキリストの流された血によって、主の前に出て、聖なる神から言葉をいただいてこの世に出て行く、祭司的な働きをします。私たちは、いわば聖なる所と世との狭間にいる仲介者であり、祭司なのです。人々に主がおられることを示し、そして人々が主なる神に導かれるように仕えていく存在です。それぞれの職場で、家庭で、神はそこにお立てになり、自分を通して神を代表しようとしておられます。

## **6A 御前に向かう主の民 100**

### 100 感謝の賛歌

王の詩篇の最後、第百篇です。この詩篇は、多くの教会で礼拝を始めるに当たってよく用いられる箇所であります。喜びつつ、感謝しつつ主の神殿の中に入り、神に仕える呼びかけを行っています。

100:1 全地よ。主に向かって喜びの声をあげよ。100:2 喜びをもって主に仕えよ。喜び歌いつつ御前に来たれ。

主の礼拝に集うように、再び「全地よ」と呼びかけています。なんとも、スケールの大きい礼拝への招きです。ですから、私たちはどこにいようと、どんな状況にあろうとも、この礼拝に招かれています。喜びの声を上げること、これは 95 篇でも命じられていました。そして、「喜びをもって主に仕えよ。」とあります。主に仕えることは喜びであります。私たちが、主に仕えることについて、いやいやながら、強いられているものであれば、どれほど主が忌み嫌われるか知れないでしょう。むしろ、そのような奉仕はしないほうがましです。

100:3 知れ。主こそ神。主が、私たちが造られた。私たちは主のもの、主の民、その牧場の羊である。

礼拝をすること、その務めは何か？それは、何かを行なうことではありません、「主を知ること」そのものです。「知れ。主こそ神。主が、私たちが造られた。」であります。主を知っていくというのは、人格と人格が触れるものです。これは、何か技法によって体得できるものでもなく、学習することのできるものでもありません。自分の内に培われていくものです。「この人は、神を知っている」と認めることのできるものです。その人が何かをしたから、ではなく、この人のあり方に神がおられることを感じ取ることができるのです。イエス様がピリポに、「わたしを見た者は、父を見

たのです。」と言われるように、御父を知っておられたので、何をされているにしてもイエス様は父を見せておられたのです。

そして、イエス様は、神とご自身を知ることそのものが永遠の命であると言われました。「ヨハネ 17:3 その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。」イエス様を知ること、そしてイエス様を知れば父なる神を知ります、このことに心を留めます。私たちが、何かをしているのではなく、私たちがこの方の内にいるのです、この方を知るので、交わるのです。そして永遠の命を持つのです。「そのあかしとは、神が私たちに永遠のいのちを与えられたということ、そしてこのいのちが御子のうちにあるということです。(1ヨハネ 5:11)」

そして、「主が、私たちが造られた。私たちは主のもの、主の民」と言っています。礼拝をする時は、95 篇にもありましたが、主が私たちが造られたということに根ざします。ゆえに、自分は自分のものではなく、主ご自身のものであります。そして次に、「牧場の羊である」ということです。この方に養われ、導かれ、守られます。すべてはこの方の声に聞き入ります。

100:4 感謝しつつ、主の門に、賛美しつつ、その大庭に、はいれ。主に感謝し、御名をほめたたえよ。

礼拝することは、喜んで仕えることであり、次に主ご自身を知ることであり、そして、神のご臨在の中に入ることです。神殿の門をくぐり、それから大庭にはいります。その時に主がおられるところに近づきます。そして大事なものは、詩篇の題名にもなっている「感謝」であります。使徒パウロが言いました。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。(1テサロニケ 5:16-18)」私たちが感謝している時に、不思議と神のご臨在に近づくのです。私たちが、96 篇にあるように主を試している時に、つまり激しい不満を持っている時に主の臨在は去ります。

100:5 主はいつくしみ深くその恵みはとこしえまで、その真実は代々に至る。

最後、礼拝のために来て、そしてその聖所に入るならば、主のご性質を知ることができます。それは、「いつくしみ深さ」また「恵み」、そして「真実」です。なんとすばらしいことでしょうか、私たちはご臨在の中で、自分が罪に定められるのではなく、その聖なる臨在において、キリストの血潮が流されているという慈しみの中に入っているのです。そして私たちが、神の好意的になっており、豊かな恵みの特権にあずかることができます。恵みの冠を受け取ることができます。そして、主は真実な方です。どんなことがあっても、決して裏切らず、見捨てず、約束されたことは必ず実現してください。

私は、メールの中で最後に書くのが好きな挨拶は、「感謝」です。あるいは「主に感謝」と書きます。すべてのことについて感謝、そこに主のご臨在を感じます。そして、主のご臨在のあるところには、いつもその慈しみが流れています。感謝を決して忘れてはいけません。感謝のない、当たり前だと思っている、当然の権利だから要求する、このようなところには神なき生活、神なき社会、神なき国になってしまいます。そこから偶像礼拝が始まります。他の自分の欲を満たす楽しみ、これらが自分を支配するようになるのです。感謝こそ、私たちを偶像から、滅びから免れさせ、神の聖なる臨在の中で自分を守る方法であります。